

阪南町埋蔵文化財報告 III

## 田山遺跡・神光寺遺跡発掘調査概要



昭和61年3月

阪南町教育委員会

## は　し　が　き

埋蔵文化財は、過去の人々が営んだ生活の証拠です。阪南町にも二十数ヶ所の埋蔵文化財の包蔵地が知られており、国および府の補助を受けて発掘調査を実施してきました。

昭和60年度は、田山遺跡・神光寺遺跡で発掘調査を行いました。田山遺跡は、縄文時代以降の包蔵地として知られており、特に中世期の蛸壺を大量に出土したことから、当時において漁労集落の性格をもっていたと考えられています。今年度の調査でも、蛸壺の破片や土錘等が出土しました。一方、神光寺遺跡は、寺院跡の推定地である他、弥生時代から近世期の包蔵地で、以前の調査では弥生時代の方形周溝墓等が確認されています。今年度の調査では、中世期の建物跡等が検出されました。

ここに、これらの調査の概要を報告いたします。この報告書が埋蔵文化財の保存や保護、そして住民の皆さんのが自分の故郷を知る上で少しでも役立てていただければ幸いです。

最後に調査にあたり御協力をいただきました土地所有者の方々をはじめ、調査を担当していただいた大阪府教育委員会の方々、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

阪南町教育委員会

教育長 庄 司 菊太郎

## 例　　言

1. 本書は、阪南町教育委員会が昭和 60 年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が実施した阪南町所在、田山遺跡ほかの緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課、松村隆文・森屋直樹両技師の派遣を受け、昭和 60 年 4 月 1 日に着手し、昭和 61 年 3 月 31 日終了した。
3. 調査の実施にあたっては、土地所有者等関係者各位から協力を受けた。ここに記して感謝の意を表する。
4. 本書の執筆は松村、森屋、三好義三が行い、文責は文末に記した。編集は松村、森屋が行った。

## 目 次

1 章	調査に至る経過	1
2 章	歴史的環境	2
3 章	調査成果	
1 節	田山遺跡	4
2 節	神光寺遺跡	11
4 章	まとめ	18

### 挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図	3
第 2 図	田山遺跡調査区位置図	4
第 3 図	田山遺跡 84-2 区 トレンチ配置図	5
第 4 図	田山遺跡 84-2 区 平面図・土層図	5
第 5 図	田山遺跡 85-1 区 トレンチ位置図	6
第 6 図	田山遺跡 85-1 区 断面図	7
第 7 図	田山遺跡 85-1 区 出土遺物	8
第 8 図	神光寺遺跡調査区位置図	11
第 9 図	神光寺遺跡 84-2 区 トレンチ配置図	12
第 10 図	神光寺遺跡 84-2 区 土層図	13
第 11 図	神光寺遺跡 84-2 区 出土遺物	13
第 12 図	神光寺遺跡 85-1 区 トレンチ位置図	14
第 13 図	神光寺遺跡 85-1 区 平面図・断面図	15
第 14 図	神光寺遺跡 85-1 区 出土遺物	16

### 図版目次

第一図	田山遺跡 84-2 区、85-1 区 全景
第二図	神光寺遺跡 84-2 区 遠景
第三図	神光寺遺跡 84-2 区 遺構
第四図	神光寺遺跡 84-2 区 遺構
第五図	神光寺遺跡 85-1 区 遺構
第六図	神光寺遺跡 85-1 区 遺構
第七図	神光寺遺跡 84-2 区 遺物
第八図	神光寺遺跡 85-1 区 遺物
第九図	田山遺跡 85-1 区 遺物

## 1 章 調査に至る経過

阪南町は南北に細長い大阪府にあって、南端に位置し、大阪北部の都市化と対照的に田園風景の拡がる所である。第二阪和国道の整備や、空港建設計画に伴って、近年泉州方面、とりわけ泉州地域での開発が活発化をみせており、阪南町域でも、徐々にではあるがこういった動きがみられるようである。こういった状況下において、阪南町は昭和60年度より、国庫補助事業として開発に伴う埋蔵文化財発掘調査を行い、遺跡の保護と解明を図ることになった。

今年度の発掘調査は別表に示す通り、田山遺跡と神光寺遺跡の2遺跡である。田山遺跡は阪南町箱作に、神光寺遺跡は阪南町石田に所在する。どちらも古くからの「村」の周辺で個人住宅の新築や、分譲住宅等の開発が主である。空港建設に伴う土取場の開発や、主要幹線道路の拡充がなされるにつれて、今後新規遺跡の発見等も予想され、発掘調査件数も増加するものと思われる。

遺跡名	№	調査地	土木工事等の目的	面積
田山遺跡	85-1	阪南町箱作 1811	ビニールハウス建築	598m <sup>2</sup>
神光寺遺跡	85-1	阪南町石田 260の4	住宅建築	330m <sup>2</sup>
神光寺遺跡	85-2	阪南町石田 212の1他	住宅建築	1293.95m <sup>2</sup>

## 2章 歴史的環境

大阪府泉南郡阪南町は、北に大阪湾をのぞみ、南には東西に連なる和泉山脈がせまっており、東西に細長い低位台地上に立地する。東は男里川によって泉南市と、西は田山川によって岬町と町域を区画している。

阪南町の歴史の幕明けは旧石器時代に遡る。玉田山遺跡、蓮池遺跡からは有舌尖頭器の出土が知られている。

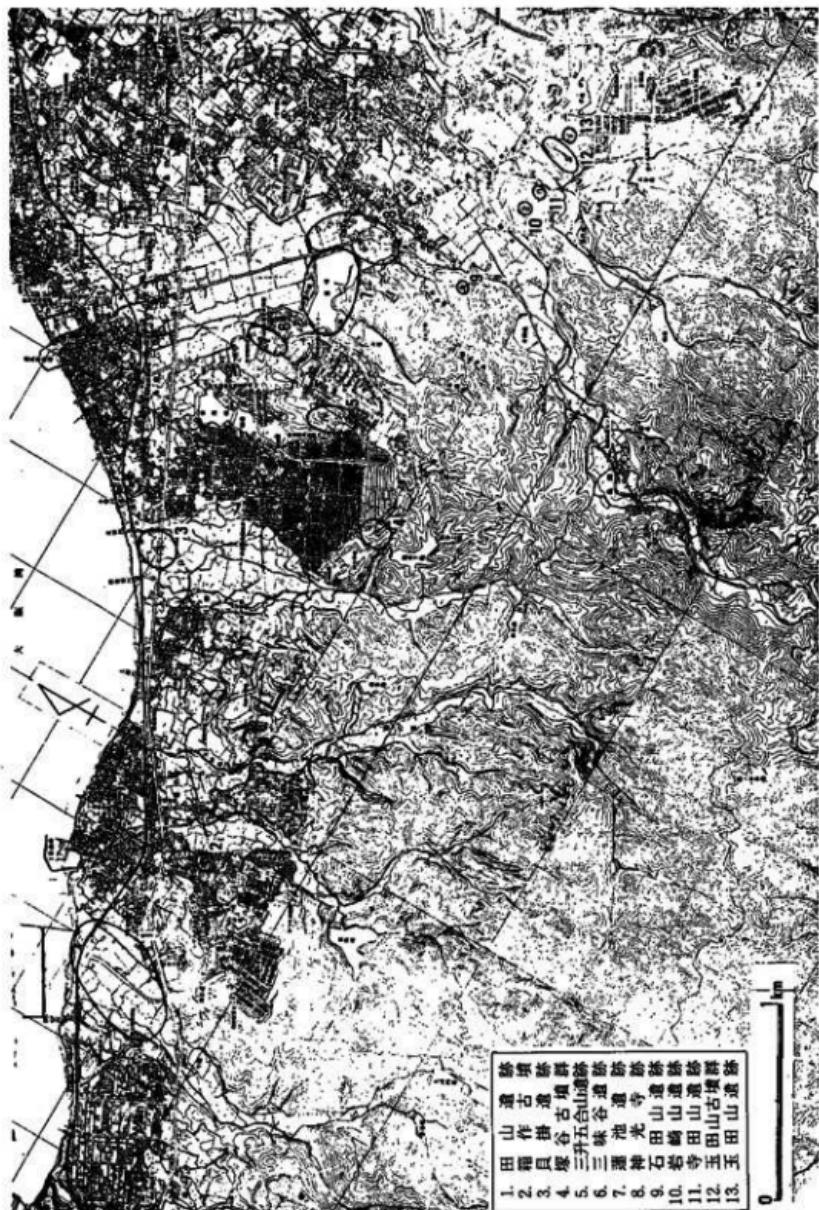
縄文時代になると玉田山遺跡、蓮池遺跡の他に寺田山遺跡、岩崎山遺跡、石田山遺跡等があり、それぞれ遺物の出土や採集が知られているが、十分な発掘調査が行われていないため判然とし難い。又、田山遺跡の調査では、石器が数十点出土しており、その内何点かは晩期に属するものである。しかし、隣接する岬町淡輪遺跡では、後期～晩期の竪穴住居址が検出されており、田山遺跡からも同様な集落の存在は十分に考えられる。

弥生時代には、神光寺遺跡から中期の方形周溝墓が検出されているほかは知られていないが、これから調査で集落部分が検出されるであろう。周辺では泉南市男里川流域の男里遺跡が弥生時代の集落遺跡として知られている。

古墳時代には岬町に宇度墓古墳や西陵古墳といった大型前方後円墳が造営されるが、阪南町でのそういう動きはみられず、後期になって玉田山1号墳・2号墳が存在する。とりわけ1号墳は横穴式石室を有し、府史跡に指定されている。しかし、こういった古墳を築造した集団の存在は明らかにはされておらず、今後集落の存在の確認がまたれる。

奈良時代以降は、神光寺遺跡、田山遺跡等があげられる。神光寺遺跡では、平安後期から中近世にかけての瓦の出土が知られており、付近に寺院跡の存在を裏付けるものである。又、田山遺跡からは奈良、平安時代から中世に至る土器、蛸壺、製塩土器等が出土しており、海岸沿いの遺跡としての特徴を持っている。

各時代ごとに周辺地域も含めて阪南町の遺跡を概観してみたが、なにぶん調査例がまだまだ乏しいため、判然としない部分が多い。今後の調査に期待するところである。



第1図 周辺遺跡分布図

### 3章 調査成果

#### 1節 田山遺跡

##### 84-2区

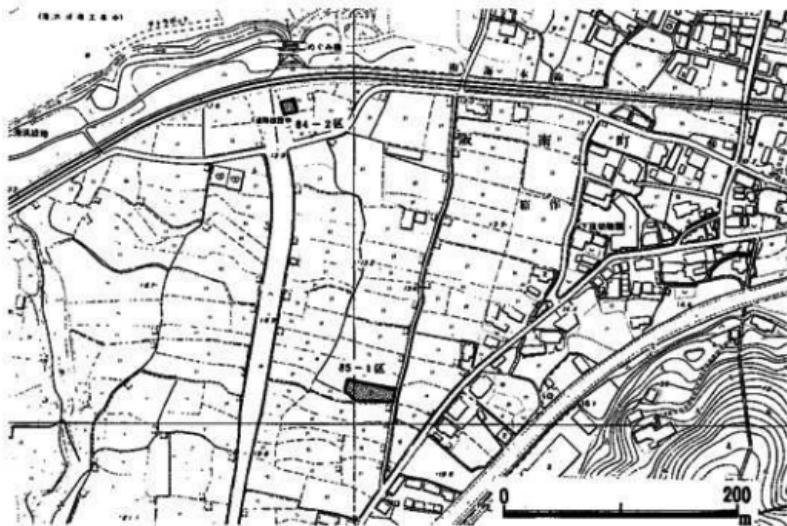
###### 1. 位置(第2・3図)

本調査区は遺跡の北端近くに位置し、海岸線からは約60m程の地点に当る。周辺の地形は基本的には北へ緩やかに傾斜している。北側は畠1枚を挟んで南海電鉄の軌道敷が走り、西側の隣接する現在工事中の用地は、かって(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施している。この調査では南海線から通称水道道の間<sup>(註1)</sup>を2地区として報告しているが、これによると12世紀と推定される掘立柱建物の他、暗渠、溝、ピット等が検出されている。

調査は申請地のほぼ中央に巾2m、長さ約8.5mの南北方向のトレンチを設定し実施した。

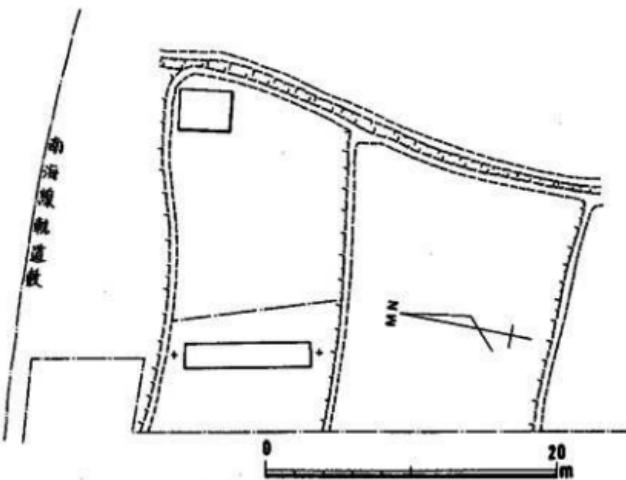
###### 2. 層序と遺物の包含状態(第4図)

層序は比較的単純な様相を示している。基本的には第1層・耕土(約20cm)、第2層・黄褐色土層(床土、約5cm)、第3層・淡黄灰色土層(10~20cm)と統き、第5層・淡灰黄色シルト層が地山である。このうち第3層は北側に厚く堆積しており、トレンチの北半部では第4層・淡黄褐色土層の薄層が介在する。この層は中世以降の耕作に伴う床土と思われる。なお地山面は北へわずかに傾斜しており、トレンチ南端で11.5mの標高を測るのに対し、北端では約10cm程低い。



第2図 田山遺跡調査区位置図

遺物は第2層の床土及び第3層の淡黄灰色土層から数十点の須恵器、瓦器、土師器等が出土している。いずれも細片であるが、瓦器には著しく退化した高台をもつ椀が、土



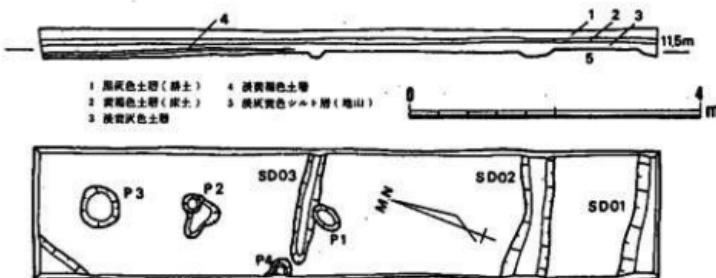
第3図 田山遺跡 84-2区 トレンチ配置図

師器では厚手の中世の靖壺が認められる。須恵器は時期の判明するものはないが、文化財センター調査時の出土遺物から考えると奈良時代に属する可能性が強い。

### 3. 遺構と遺物（第4図）

遺構は3条の溝とピット数個で、いずれも地山面において検出した。溝は3条とも東西に走り、中世の包含層と同質の淡黄灰色土が堆積している。

SD01は巾45cm以上、深さ約10cmと浅く、遺物は土師器の細片が少量出土しているのみである。SD02は巾35~60cm、巾約10cmを測る。出土遺物は少ないが瓦質の摺鉢、靖壺等が含まれている。SD03も巾約30cm、深さ5~10cmの小溝で、土師器の細片が数点出土しているにすぎない。以上の3条の溝はほぼ平行に走り、また現在の土地区分とも合致する方向に走ることから中世の耕作に関わる遺構と推定される。



第4図 田山遺跡 84-2区 平面図・土層図

ピットについては調査面積の制約もありまとまるものはない。ただピット4は径35cmを測る円形のピットであるが、底に砂岩の根石を入れているので柱穴と考えられる。深さは10cm程である。深さについては他のピットも5~10cmと浅い。ピットからの出土遺物は少なく、歴史な時期の決定は困難であるが、瓦器の小片を含むものもあるので中世の中には収まるものと思われる。

#### 4. 小 結

今回の調査では遺構、遺物とともに文化財センターの調査と共通した結果が得られた。先の調査では12世紀代と推定される掘立柱建物が検出されているが、今回の調査結果からも中世のある時期には居住地の一画であったことが推定された。

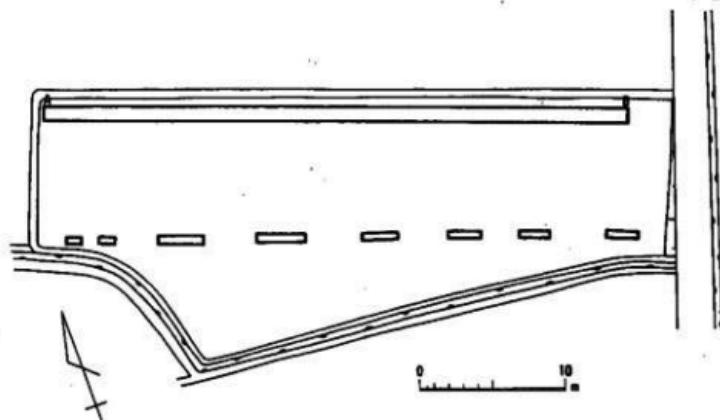
ところで、ピットの遺存状態から当該地が耕地造成の際にかなりの削平を受けていると推定される。今回の調査で第3層とした土層は床土と思われる薄層を挟むことから耕作土と考えられるが、出土遺物が中世以前に限られ、かつ地山上に直接堆積することなどから、中世の時期には地下げを伴う耕地の造成が行なわれたものと推定される。  
(松村)

(註)『田山遺跡』 (財)大阪文化財センター 1983年

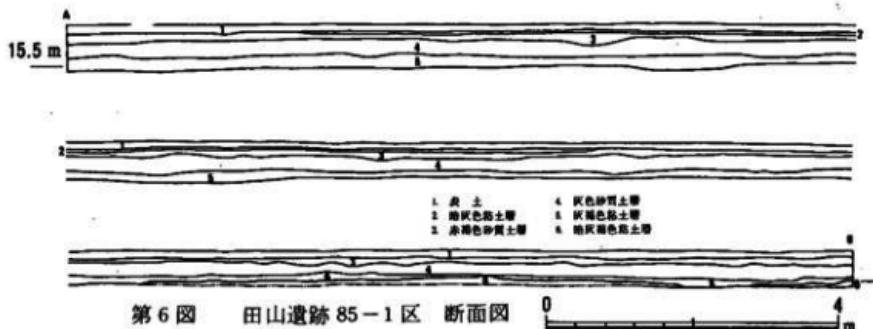
#### 85-1区

##### 1. 位 置(第2、第5図)

本調査区は阪南町箱作1811に所在するビニールハウス設営に先立つ事前調査である。田山遺跡の東南部に位置し、周辺の調査では縄文時代の石器及び、中、近世の瓦器、陶磁器、蛸壺、石臼、五輪塔等が出土している。漁具及び蛸壺の出



第5図 田山遺跡85-1区 トレンチ位置図



土は泉州のとりわけ海岸部では普遍的にみることができ、泉州の集落の漁村的性格を伺いみることができよう。一方では石臼や五輪塔は製品、未製品ともにかなりの量が出土しており、石工集団の存在が考えられる。

## 2. 調査の概要（第6図）

調査は、ビニールハウス基礎部分に対して行った。先ず、当該地北側に1m幅の南北に長いトレンチを設定し、人力で掘削を行った。層位は上から、第1層耕作土、第2層暗灰色粘土、第3層赤褐色砂質土、第4層灰色砂質土、第5層灰褐色粘土層、第6層褐色粘土層の順である。第4層は遺物包含層で、瓦器、土師器、陶磁器片や、蛸壺、土錘等の漁具、瓦等が出土している。第5層以下は無遺物層でいわゆる地山である。遺構は検出されなかった。南側に対しては確認のため0.5m幅のトレンチを設定して行ったが、基本的層位は変わらず、遺構等の検出はされなかった。

（森屋）

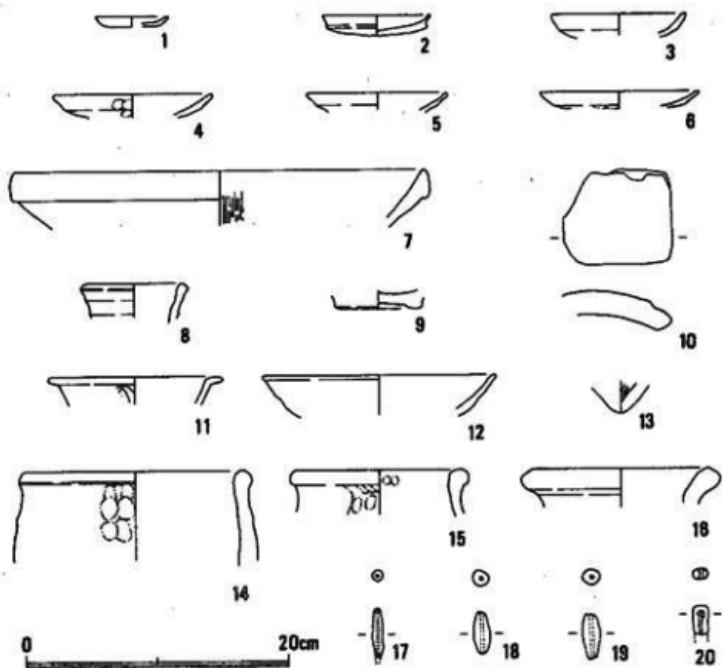
## 3. 遺物（第7図・図版八）

1は土師質の小皿であり、復元口径は3.3cm、同器高は0.8cmをはかる。調整は内・外面とも指押さえである。胎土は0.5mm大の砂粒子を若干含み、色調は外面が浅黄橙色、内面が橙色である。焼成はやや良で比較的硬質である。

2も土師質の小皿であるが、一般に白土器と言われているものである。復元口径は8.1cm、残存高は1.6cmである。調整は指押さえである。胎土は0.5~1.0mm大の砂粒子を含むが、全体的にち密である。色調は外面が白橙色、内面が浅黄橙色である。焼成は良好で、硬質である。

3は土師質の皿で、復元口径は13.2cm、残存高は1.9cmである。調整は磨減が著しく不明である。胎土は砂粒子をほとんど含まず、密である。色調は外面が浅黄橙色で、内面が白橙色である。焼成はやや良好である。

4は瓦器碗で、復元口径12.0cm、残存高は1.9cmである。調整は外面が指押さえであるが、内面は磨減が著しく不明である。胎土は1mm大の砂粒子を若干含



第7図 田山遺跡 85-1区 出土遺物

むが、密である。色調は外面が暗緑灰色で、内面が灰赤色である。焼成は良好である。

5も瓦器碗で、復元口径 10.4 cm を呈し、残存高は 1.5 cm である。調整は磨滅が著しく不明である。胎土はち密である。色調は外面が明灰色、内面が灰褐色である。焼成はやや良好である。

6は瓦器皿で、復元口径 11.9 cm を呈する。残存高は 1.3 cm である。調整は外面が指押さえであるが、内面は磨滅が著しく不明。胎土は 1 mm 大の砂粒子を比較的多く含むが、ち密である。色調は外面が浅黄橙色、内面が橙色である。焼成はやや良好である。

7は瓦質のすり鉢で、復元口径 31.1 cm を呈する。残存高は 4.4 cm である。内面に 1 ~ 2 mm 間隔ですり目が施されている。胎土は 0.5 ~ 1 mm 大の砂粒子を含むが、ち密である。色調は外面が暗灰色、内面が赤黒色である。焼成は良好である。

8は須恵器の壺である。復元口径は7.2cm、残存高は3.0cmである。内・外面にロクロ痕が残る。胎土は0.5~1.0mm大の砂粒子を若干含むが、ち密である。色調は外面が青灰色で、内面も青灰色である。焼成は良好である。

9は青磁碗の底部であると思われる。底部の復元直径は6.8cm、残存高は1.4cmである。削り出しの口台を有する。磁胎は灰白色で、精良である。砂粒子などを含まない。外面の色調は明緑灰色、内面は灰白色である。焼成は良好である。

10は平瓦である。かなり磨滅しているが、側面はヘラ削り調整されているようである。凹面に摸骨痕と思われる跡がみられる。残存幅は8.3cm、残存長は7.2cmである。胎土には2.0~5.0mm大の砂粒子を若干含むが、全体的にち密である。色調は凹面が暗赤灰色、凸面が赤灰色である。焼成は良好である。

11は青磁碗で輸入品と思われる。外面に蓮弁を施している。復元口径は11.8cmを呈し、残存高は2.3cmである。磁胎は灰白色で精良である。外面の色調は明オリーブ灰色で、内面は明緑灰色である。焼成は良好である。

12は施釉陶器の碗と思われる。内・外面に釉が施されているが、かなり剥脱している。復元口径は17.8cm、残存高は3.3cmである。外面の釉の色調は淡黄色で、内面は浅黄色である。焼成は良好である。

13は土師質の土器の底部で、器種の詳細は不明である。残存高は2.3cm、胎土はち密、色調は外面が橙色、内面が赤橙色である。焼成は良好で硬質である。

14~16は土師質の蛸壺で、一般に大型蛸壺と称され、ま蛸等飯蛸に比して大きい蛸を捕獲するのに用いられたと考えられているものである。

14は復元口径31.1cm、残存高4.4cmであり、外面に指圧痕が残る。胎度は0.5~2.0mm大の砂粒子を含む、外面の色調は暗灰色、内面は赤黒色である。焼成は良好である。

15は復元口径11.8cm、残存高3.6cmである。外面に指圧痕が残り、内面は指ナデ調整されている。胎土はち密であるが、0.5mm大の砂粒子を若干含む。色調は外面が橙色、内面も橙色である。焼成は良好である。

16は復元口径13.0cm、残存高2.9cmをはかる。胎土には0.5~2.0mm大の砂粒子を比較的多く含む。色調は外面が橙色、内面も橙色である。焼成は良好である。

17~20は土師質の土錘で、20はいわゆる有孔土錘、その他は管状土錘である。17は残存長2.7cm、直徑0.75cm、孔径0.1cmで、胎土はち密、焼成も良好である。色調は赤色である。

18は長さ3.3cm、直徑1.3cm、孔径0.25cmをはかり、完形品である。胎土は1.0~2.0mm大の砂粒子を若干含む、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色である。

19は残存長 3.4 cm、直径 1.35 cm、孔径 0.2 cmである。胎土はち密で、焼成も良好である。色調は橙色。

20は残存長 2.2 cm、長径 1.0 cm、短径 0.8 cm、孔径 0.2 cmである。胎土はち密で、焼成も良好である。色調は明黄褐色である。 (三好)

(註)『田山遺跡』 (財)大阪文化財センター 1983年

## 2 節 神光寺遺跡

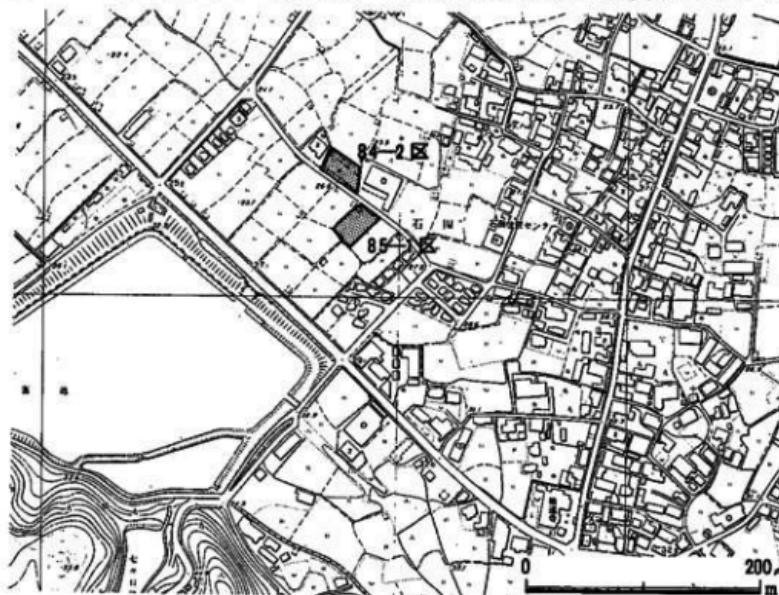
### 84-2区

#### 1. 位置(第8・9図)

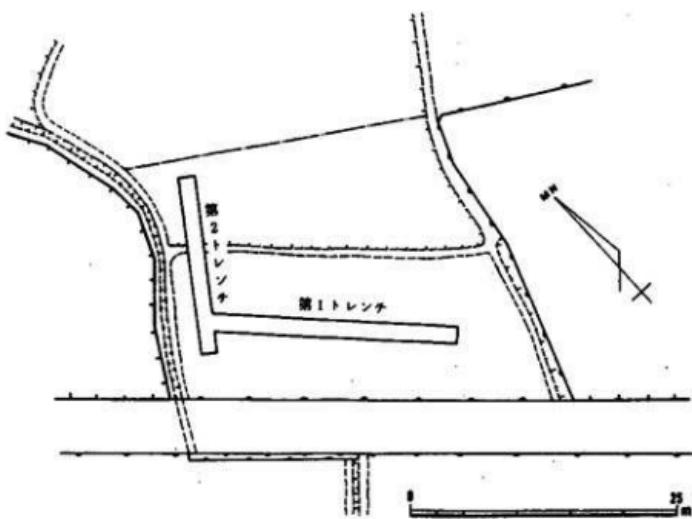
本調査区は神光寺遺跡の中では北端に近い位置に当たる。遺跡北部域の地形は基本的に南から北へ緩やかな傾斜をもっている。調査対象地は南北に並ぶ水田2枚分で、現状では北側の水田が約55cm低い。調査は幅2mのトレンチをT字形に配し、第1トレンチは2枚の水田にわたるよう南北方向に、第2トレンチは北西-南東方向に、それぞれ16mと23mの長さで設定した。

#### 2. 層序と遺物の包含状態(第10図・11図、図版第四)

層序は北側が水田造成に伴う削平を受けていたため南北の水田で大きく異なる。南側水田の基本的層序は、第1層・耕土(約20cm)、第2層・淡黄褐色土層(床土・約5cm)、第3層・淡灰色土層(5~10cm)、第4層・淡黄灰色土層(10~20cm)、第5層・灰褐色土層(約15cm)、第9層・灰茶色シルト層と続く。第9層は径5~10cm下の礫を含み、部分的にその上位数cmが灰黒色を呈する。なお第9層は第1トレンチではほぼ平坦であるが、第2トレンチでは南東端が北西端に比べ40cm余り高く、かつ北西側にいくに従い礫を含まない淡黄灰色シルトに漸



第8図 神光寺遺跡調査区位置図



第9図 神光寺遺跡 84-2区 トレンチ配置図

移的に変化する。また第5層については地山が相対的に低い部分に堆積する土層で、第2トレンチの南東端から約8mの付近までは認められない。

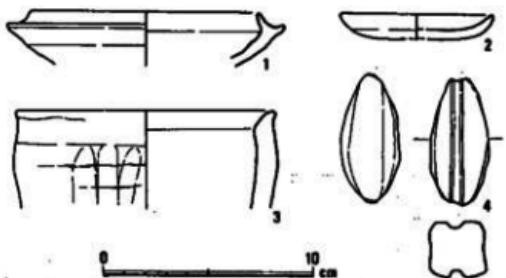
北側の水田部では約20cmの耕土の下は直ちに第9層が現われた。これは先述した如く水田造成の地下げによるものであろう。

次に各層の遺物の包含状態について説明したい。第1・2層、すなわち耕土、床土からは若干の瓦器、土師器、陶磁器等の中・近世の遺物が混在した状態で出土している。第3層からは、層自体が薄いこともあって量的には少ないが瓦器碗、土師器の小皿、蛸壺、青磁碗(図版第七、7)瓦等が出土しており、近世以降の遺物は含まない。

第4層からはビニール袋2袋程の遺物が検出された。須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、白磁、瓦等が含まれるがいずれも細片化している。土師器の小皿、蛸壺(3)、瓦器碗(5・11)等が認められる。

第5層中には、須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、土錘等がビニール袋に2袋程包含されていた。図示し得る遺物は少ないが第4層に比べると相対的に大きい破片が多い。

須恵器では立上がりが矮少化した杯身(1)が存在するが、時期の判明する須恵器では6世紀末~7世紀初頭にかかるものが他に2・3点存在する。土師器は大小の皿(2・10・14)が認められ、底部に糸切り痕を残す例もある。黒色土器(8)は内面と口縁部外面にのみ炭素を吸着させたA類が多いが、B類もわずかに



第11図 神光寺遺跡84-2区 出土遺物

認められる。瓦器も数点のみであるが、底部片ではしっかりした高台をもつ古いタイプのものが認められる(9)。有溝式の土錘(4)は両端が尖り氣味の橢円形を呈し、対向する2つの側面に溝を設けている。長さ6.1cm、重さ50g、灰褐色を呈し土師質であるが、硬く焼かれている。

### 3. 遺構(図版第四)

第2トレンチで検出した砾群が、検出された唯一の遺構である。位置、方向ともに現在の畦と合致し、径10cm大のものから大きいものでは長さ50cm程の砾が一部重なった状態で置かれている。先の層序から言えば第4及び第5層の高さに相当する。耕地の境界ないしは畦の補強を目的としたものであろう。時期については先の層位との関係から中世まで遡る可能性がある。

### 4. 小結

今日の調査結果から得られた2、3の知見についてまとめておきたい。まず遺跡の範囲についてである。今日の調査地点は從来の遺跡範囲の認識では北端に位置するが、良好な包含層が認められたことにより、遺跡の範囲はなお北側に広がることが予想される。

第2に10~11世紀の包含層(第5層)の存在が確認されたことである。層自体は二次堆積の可能性もあるが、大型の土器片も含むことを考えると至近の位置に当該期の居住地が存在すると推定される。和泉の開発の歴史の中で、10世紀がひとつの画期であることは既に指摘されているが、神光寺遺跡もこの時期に開発の画期をもつ



第10図 神光寺遺跡  
84-2区 土層図

可能性が強い。

出土遺物では底部糸切りの土師器皿の存在が注意される。この種の土器は泉州各地で散見されるが紀伊と共通する手法であり、中世における土器の流通の問題解明に手掛りとなる遺物である。  
(松村)

(註)広瀬和雄氏は10世紀を「条理地割内部の開発と再開発」が進んだ時期とされている。神光寺遺跡周辺でも小規模ながら条理地割の遺存が認められる。

広瀬和雄「中世への胎動」『日本考古学』6 岩波書店 1986年

### 85-1区

#### 1. 位 置(第8・12図)

本調査区は阪南町石田260の4に所在する住宅建設に先立つ事前調査である。神光寺遺跡の西北部に位置し、周辺の調査では弥生時代中期の方形周溝墓や中、近世の遺物包含層が確認されている。

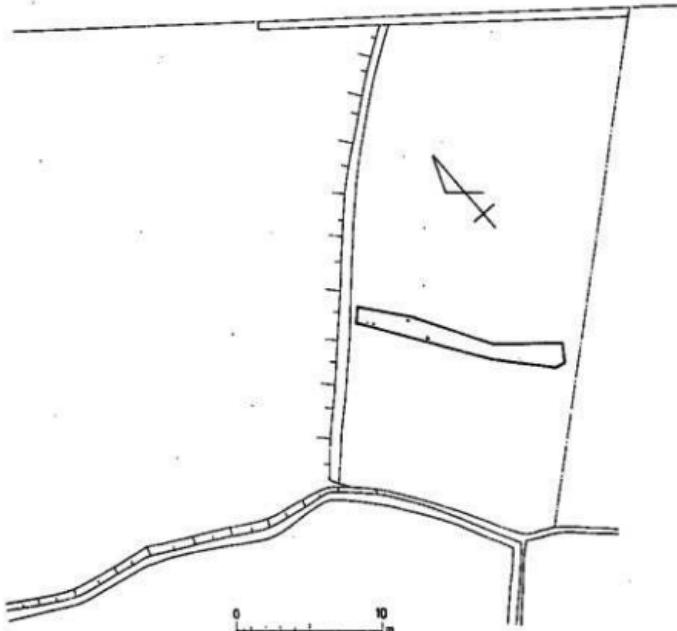
調査は擁壁工事部分に対し、幅1m×長さ14mのトレンチを設定し、盛土(約

1.2m)をバ  
ックホウで掘  
削した後、第  
2~第5層ま  
で(約40cm)  
を人力で調査  
を行った。

#### 2. 基本層序

(第15図)

層序は上層  
より、第1層、  
盛土・第2層、  
灰色微砂混り  
粘土・第3層  
灰黄色粘質微  
砂・第4層、  
灰褐色微砂・  
第5層、淡灰



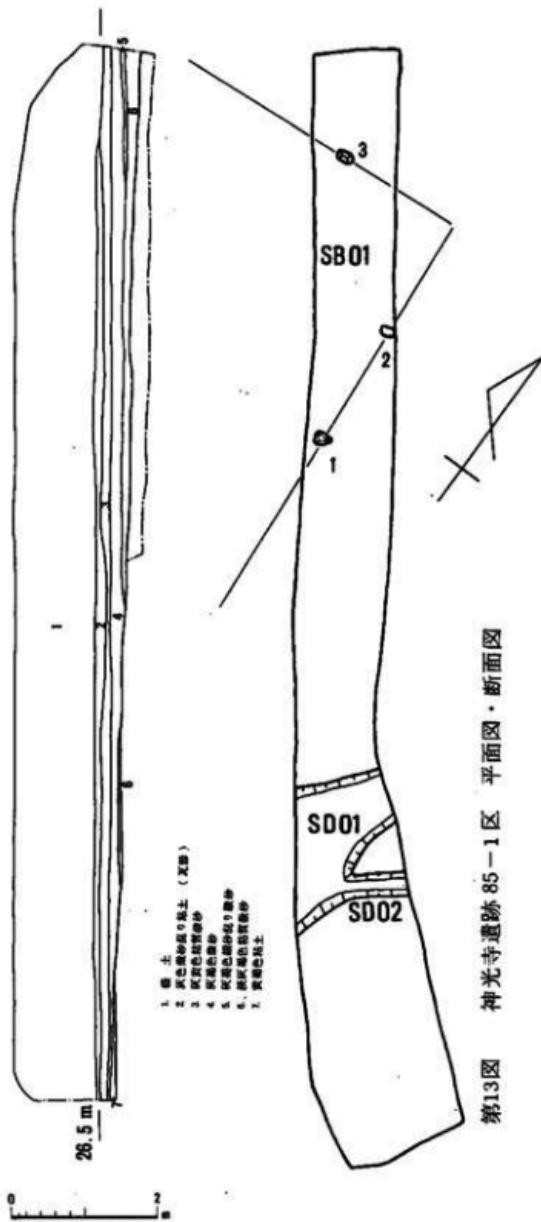
第12図 神光寺遺跡85-1区 トレンチ位置図

色微砂・第6層黄色粘土（地山）である。第2層～第5層中からは、瓦器、瓦片が出土しており全体的に西に向ってさがる堆積状況を見せる。これは蓮池上池、蓮池を形成する谷が西北に派生してのびており、本調査区が、その谷の東側縁辺部に所在するためである。

### 3. 遺構

（第15図、図版五・六）

**SB01** 第6層黄色粘土（地山）直上で3個の礎石を検出した。礎石1、2はほぼ南北にのびており、トレンチより北側に1間延長する建物跡を復元できる。しかし、その大部分はトレンチ外にあるため、建物の規模は不明である。建物の時期は包含層中の遺物よりその下限を13世紀後半と考えられるが、この時期に一般的住居への礎石建物は類を見ないと思われる。上層からの柱穴の切り込みを見逃がしていた可能性もあり、根石だけが残ったのかもしれない。礎石2にかかるトレンチ断面を精査し観察したが、柱穴の掘り方は確認出来なかった。礎石建物が



神光寺遺跡85-1区 平面図・断面図

第13図

その上屋を瓦の重量によって建立させしめるものであるとすれば、当調査区からの瓦出土量は微量であり、掘建柱建物の可能性が強いと考えられる。

#### SD 01

トレンチ中央やや東側で幅 0.7 m ~ 1.0 m、深さ 0.05 m 程の溝を検出した。埋土は第 5 層（淡灰色微砂）である。浅い溝で、人為的なものとは考えにくい。

#### SD 02

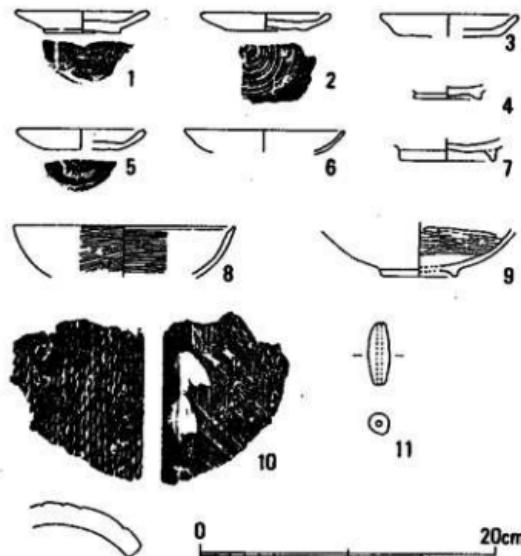
SD 01 より派生する幅 0.2 m、深さ 0.05 m 程の溝である。埋土は SD 01 同様灰色微砂である埋土中より瓦器片の出土を見る。

#### 4. 遺物（第 14 図）

コンテナ 1 箱程の遺物が出土した。図示し得る遺物は包含層出土のものだけで、遺構からのものはない。

##### 小皿（1・2・3・5・6）

小皿は土師質のもの（1・3）、須恵質のもの（2・5）、瓦器皿（6）がある。このうち底部に糸切痕のあるもの（1・2・5）がある。この種の技法は紀伊地方によく見られ、泉州地域でも見られることが多い。



第 14 図 神光寺遺跡 85-1 区 出土遺物

### 瓦器碗（4・7・8・9）

(4)・(7)は底部のみであるが、しっかりした高台をもつ古いタイプのもの(?)と、やや高台の退化しているもの(4)がある。(8)は体部から口縁部にかけて細かな暗文がみられる。(9)は体部内面にやや粗い暗文がみられる。外面には指頭圧痕を残す。

### その他（10・11）

(10)は丸瓦片である。凸面は縄目叩きの後、横方向にナデを施こすが、完全に縄目痕をスリ消してはいない。凹面は細かな布目圧痕及びコビキ痕がみられる。八十し砂の使用をみられない。(11)は管状土錘である。（森屋）

（註）『神光寺跡発掘調査報告書』 阪南町教育委員会 1982年

## 4章 ま と め

今回報告した調査は60年度分も含め、わずかに4件であり、田山、神光寺両遺跡に限られる。いずれも個人住宅建設等に伴う小規模な調査に留まり、遺跡の規模、性格を解明するのには、今後の調査を待たねばならない。本章では、両遺跡の既応の調査をもふまえ、今後の課題を提示するだけに留めたい。また、神光寺85-2区は時間的都合により本報告に掲載がかなわなかつたが、本章をかりて簡単な説明を行いたい。

### 田山遺跡

田山遺跡に関しては、（財）大阪文化財センターが発掘調査を実施しており、12世紀を中心とした掘立柱建物等の遺構が報告されている。（註1）

遺物は縄文時代～弥生時代の石器や奈良時代の須恵器等の出土をみると近隣に当該期の生活空間が所在していたことを示唆する。今回の調査では新たな知見は得られなかつたが、85-1区では遺物包含層は確認されたものの、遺構は検出されず、遺跡の中心は北側に片寄るものと思われる。

## 神光寺遺跡

先に今回報告出来なかった 85-2 区について概略を説明する。85-2 区は波太神社のすぐ北側、蓮池の東側に位置する。大阪府水道部の水道管埋設工事に先づ調査によって確認され、60 年 10 月の遺跡範囲の拡張がなされた地点である。基本層序は、上層より耕作土、庄土、灰褐色粘質土（遺物包含層）、黄色粘土（地山）の順である。包含層中よりは、須恵器、瓦器、瓦片等が含まれる。

遺構は弥生時代後期の溝、流路、古墳時代前期～中期の流路、平安後期～中世（鎌倉時代）の掘立柱建物、井戸、土坑、溝、流路等が検出された。遺物は、瓦が大半を占め、コンテナ約 50 箱のうち 8 割を占める。ほとんどが平安時代後期から鎌倉時代のもので、その大半は、井戸枠に転用されたものである。

既述の調査をみると、弥生時代には蓮池北側で中期の方形周溝墓が検出されており<sup>(註2)</sup>、蓮池東側、85-2 区に近接する地点でも中期末～後期の土塙が検出されている。85-2 区では山裾を東西にはしる V 字溝を検出した。未だに居住跡の検出例はないが、近隣に居住空間が存在していたことは明確であろう。また、古墳時代前期（布留期）～中期にかけての流路が検出されており、コンテナ 2 箱程の遺物が出土している。かなり磨滅を受けているが、東側の玉田山遺跡では 6 世紀の須恵器焼跡が発見されていることもあわせて考えると、弥生時代中期から古墳時代にかけての集落の存在が伺がわれる。<sup>(註3)</sup>

奈良時代～平安時代中期の遺構遺物等は、現段階では観取しない。

平安後期～中世には遺跡範囲が拡大するようであるが、明確な集落範囲は把握し得ない。蓮池西側には阪南町域で唯一条里制地割が観察できる。蓮池北側部分の 84-2 区、85-1 区は遺跡北端に位置するが良好な遺物包含層が存在し、建物跡が復元できる。そして蓮池東側では大量の瓦（平安時代後期）の出土と掘立柱建物跡が検出されており、神光寺跡の所在を推定させる。そして農業用溜池としての蓮池や蓮池上池の存在がある。蓮池等の構築時期や条里制施行時期の問題はまだまだ調査しなければならないが、溜池を中心として、それを鎮護するための波太神社や神光寺、今尚条里制地割を残す水田域、そして「村」が一体となった遺跡が想定される。集落域の調査は進んでいないが、現在の石田集落にラップする形で集落域が存在していたのではないだろうか。

時間的制約により、挿図等の完備できない「まとめ」となり、甚だまとまりのない文章となつたが、今後の調査に役立つものが少しでもあれば幸いです。

今回の調査に参加、協力して頂いた、三好義三、藤田道子、森田優美、松井明信の諸氏には未筆ながら感謝の意を表したい。

(森屋)

註1 『田山遺跡』 助大阪文化財センター 1983年

註2 『神光寺跡発掘調査報告書』 阪南町教育委員会 1982年

註3 大阪府教育委員会文化財保護課技師 松村隆文氏御教示による。

# 図 版





調査区遠景（北から）



調査区隣地保存の板碑



第1トレンチ全景（南東から）



第2トレンチ全景（南西から）



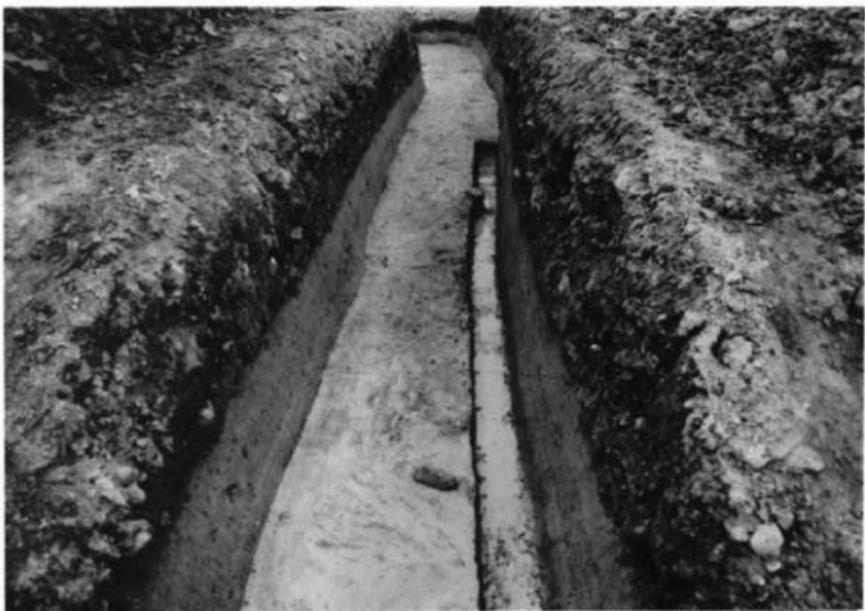
第1トレンチ 土層断面



第2トレンチ 碓群（北東から）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



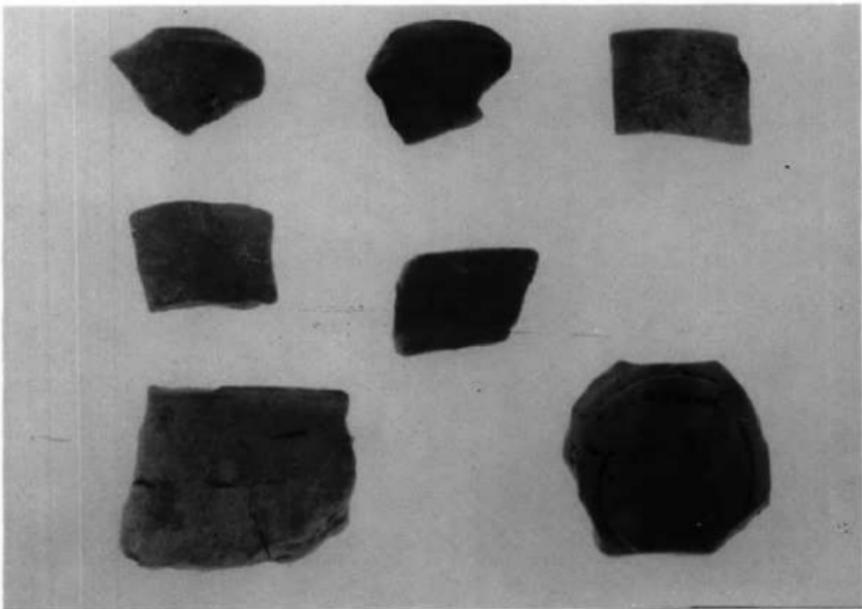
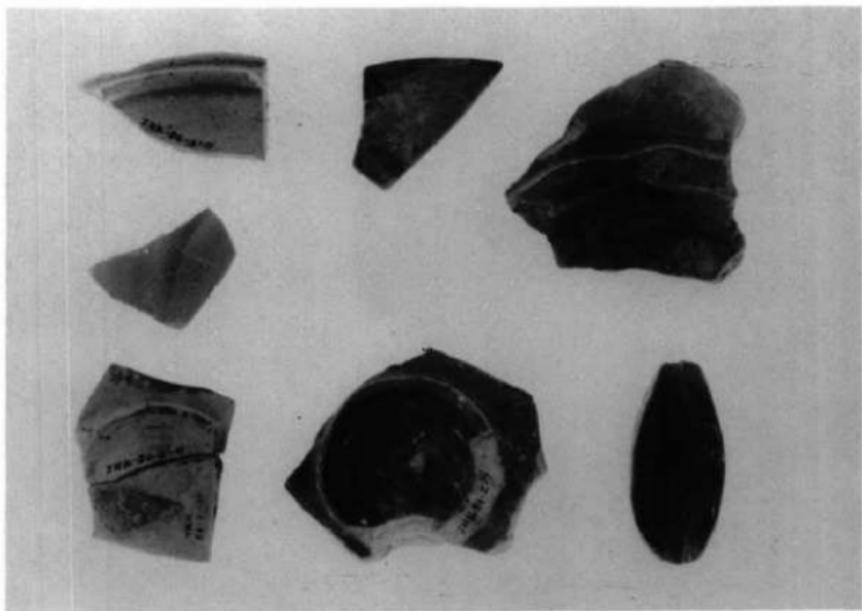
S B 0 1 ( 東から )



S B 0 1 確石 ( 東から )

図版第七

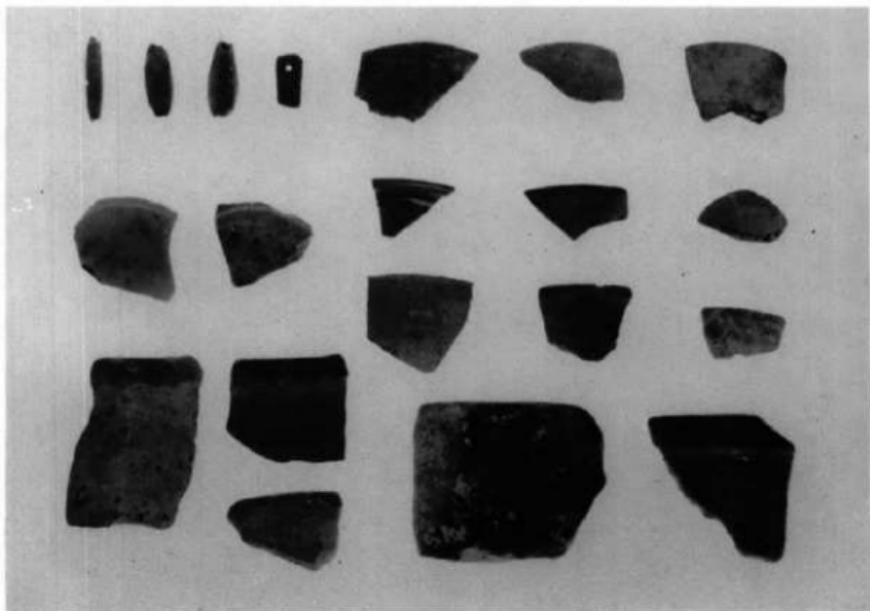
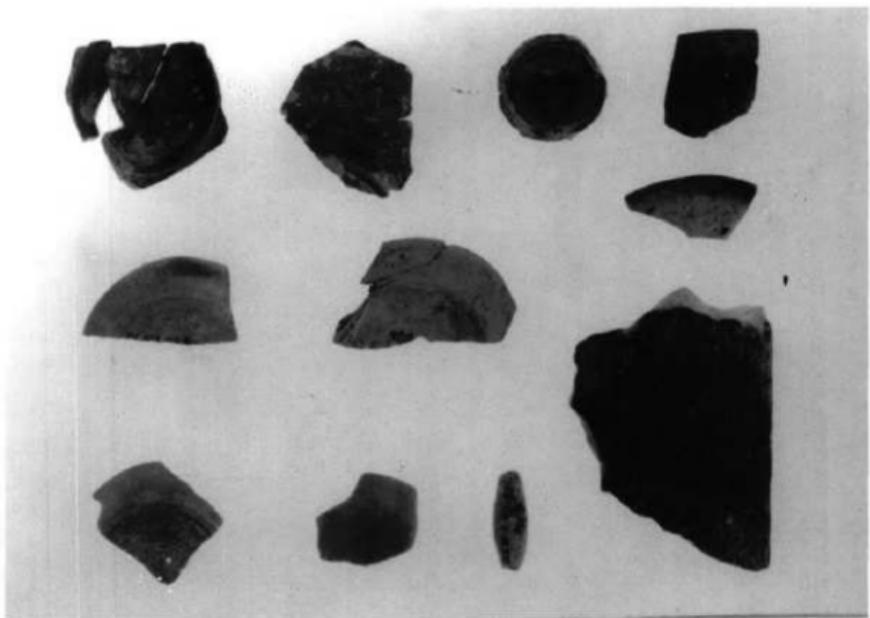
神光寺遺跡84-2区 遺物



図版第八

神光寺遺跡85-1区 遺物

田山遺跡85-1区 遺物



阪南町埋蔵文化財報告 Ⅲ

田山遺跡・神光寺遺跡発掘調査概要

昭和61年3月31日

発行： 阪南町教育委員会社会教育課

大阪府泉州郡阪南町尾崎町35の1

印刷者： 丹羽印刷所  
和歌山市紀三井寺395-8